

2013年度第7回オープンセミナー「基礎研究 × 国際協力」を開催

農学国際教育協力研究センター (ICCAE) は、大学院生命農学研究科および生物機能開発利用研究センターとの共催により、3月24日(月)、野依記念学术交流館で2013年度第7回オープンセミナーを開催しました。今回は、通常のオープンセミナーよりも規模を拡大し、「基礎研究×国際協力」のテーマの下、イネに関する基礎研究の成果を活用した開発途上国の稲作改善に取り組む講師2名がそれぞれの立場から報告を行いました。

まず、イネの基礎研究を世界レベルで推進している生物機能開発利用研究センターの芦荊基行教授が「遺伝子を利用したイネの改良チャレンジプロジェクト～WISH～」の演題で、基礎研究によって明らかにしたイネの生産性を向上させる遺伝子や各種ストレス耐性遺伝子などを導入した非遺伝子組み換えイネ品種の作出とその普及に関する「WISHプロジェクト」について発表しました。続いて、榎原大悟ICCAE准教授が「イネと研究者を育てて、アフリカの食糧不足を解消する」の演題で、ケニアで取り組んでいる現地の稲作における課題を解決するための国際共同研究と人材育成の必要性について報告しました。二人の講演を受け、浅沼修一ICCAE教授の司会で行われた総合討論においては、学内外から集まった100人近い参加者との間で活発な質疑応答が行われました。基礎研究の成果を国際協力に結び付ける取り組みに対する関心の高さが窺われる熱のこもったセミナーとなりました。(榎原大悟)



講演する芦荊・生物機能開発利用研究センター教授

ケニアにおけるイネの現地圃場試験

菊田真由実 大学院生命農学研究科博士課程後期2年(協力ネットワーク開発研究領域)

2014年1月より約1ヵ月半、ケニアに滞在し、イネの節水栽培適応性に関する圃場試験のデータ収集を行いました。コメの約90%が灌漑水田で生産されているケニアでは、灌漑水の不足がコメ増産の制限要因となっており、節水栽培技術の確立が重要な研究課題となっています。私は、節水栽培技術として有望な水田における間断灌漑技術および灌漑畑栽培技術のケニアにおける適応性を検証するとともに、節水栽培に適したイネ品種を同定するための圃場試験をケニア農業研究所(KARI)ムエア支所の試験圃場で実施しました。現地では、日本と違って実験環境が整っていない部分も多くあり、思うように作業ができず苦労したこともありましたが、現地の研究員や学生らとともに、作業や活動を行ったことは良い経験となりました。

また、滞在期間中、ケニア各地の稲作地域を訪問し農家圃場を見学する機会を得ることができました。現地の稲作の実態を自分の目で見て、ケニアの稲作における節水栽培技術の重要性を再認識することができました。この経験は、今後、博士課程の研究を進めていくうえで大変良い刺激となりました。最後に、ケニア滞在中、研究を円滑に進めるためにサポートくださったKARIムエア支所のスタッフの皆さまに心より感謝を申し上げます。



ケニアの農家圃場見学の様子